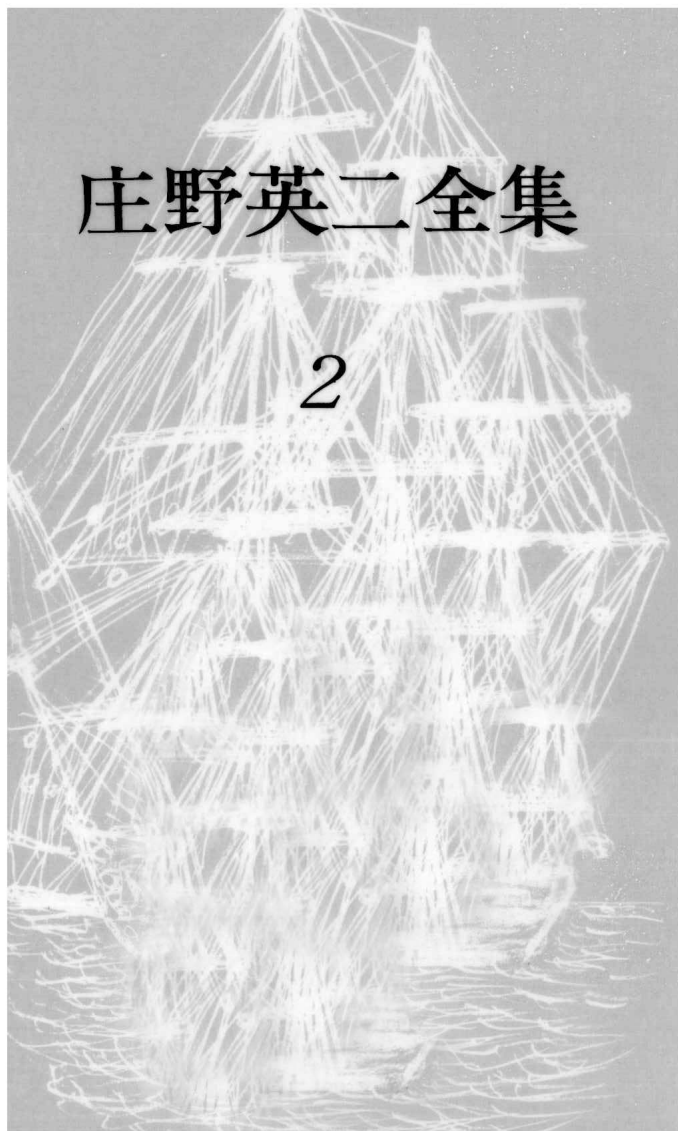




# 庄野英二全集

2





庄野英二全集 第二卷

印刷 昭和五十四年九月二十五日

発行 昭和五十四年十月十日

著者 庄野英二しょうの えいじ

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

〒一六二 振替 東京五一―三三二番  
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五

電話 東京〇三二六〇一三三二一(代)

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

定価 二五〇〇円

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

庄野英二全集 第二卷

装幀  
協力

装幀  
カット

山  
高  
登

庄  
野  
英  
二

# 目 次

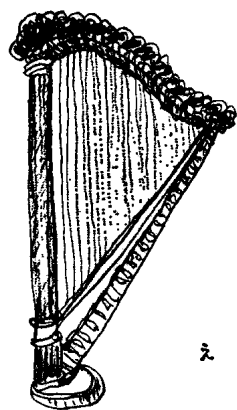
雲の中のにじ……………7

ふたと真珠<sup>しんじゆ</sup>……………131

|   |   |   |   |       |       |
|---|---|---|---|-------|-------|
| あ | と | が | き | ..... | 358   |
| 庄 | 野 | 英 | 二 | 全     | 集     |
| 庄 | 野 | 英 | 二 | 第     | 二     |
| 庄 | 野 | 英 | 二 | 卷     | 解     |
| 庄 | 野 | 英 | 二 | 題     | ..... |
| 庄 | 野 | 英 | 二 | 覺     | え     |
| 庄 | 野 | 英 | 二 | 書     | ..... |
| 前 | 川 | 康 | 男 | ..... | 364   |
| 戸 | 塚 | 惠 | 三 | ..... | 360   |



雲の中のじ





1 国境近くの山上には、うす雪がつもっていた。

荷物でふくれあがった大型ジープが、わだちの雪をはがしながら走っていった。

ジープはおもちゃのように、あざやかなローズ色にぬられていて、ボンネット（エンジンのおい）の上には、白字で大きくラベル号と書かれてあった。

ジープには、そうじゅう者をふくめて三人の男が乗っていた。三人は赤いトルコ帽をかぶり、うらに毛皮をはりつけたおなじジャンパーで上体をくるんでいた。

ジャンパーは、雪が見えだしてから、あわててとりだしたのであった。

けさ、ベイルート（レバノンの首都）では、夏のような太陽に地中海がまぶしく光っていた。ホテルの庭には水着すがたの観光客が、ビーチパラソルの下でコココーラをのんでいた。

地中海が見えているあいだは、三人ともつい数日まえまで、パリでマロニエの落ち葉をふんでいたことなど、すっかりわすれてしまっていた。

「あれが国境だな。」

ハンドルをにぎっている男が、となりの、色の白い背の高いわかい男にいった。

「うん、そうだよ。」

その男はうなずいた。背が高すぎて、きゅうくつそうに、すわっていた。いちばん外がわに日本人

がいた。

ふみきり番のような小屋と横木よこぎがグーツと前に近づいてきた。

ふみきり番のような小屋から、自動小銃じどうしょうじゅうを持った兵士がふたり、とびだしてきた。

ハンドルをにぎっていた男が、三人のパスポート（外国を旅行するときにひつような身分証明書）をまとめて兵士にわたした。

兵士はパスポートを小屋へ持つてはいつて、スタンプをおしてかえしにきた。

「ドイツ人。」

と、兵士がさげんだ。

ハンドルをにぎっている男が、

「ヤア。」

と、答えた。

兵士は、パスポートにはりつけてある写真と本人の顔とを見くらべてから、パスポートをかえした。

「フランス人。」

兵士がさげんだ。

色の白いわかい男が、

「ウイ。」

と、答えた。

兵士は、パスポートの写真と本人の顔とを見くらべて、すぐにかえした。

「JAPAN。」

三人めの男が、

「ホイサ。」

と、答えた。そしておかしくなって、自分でわらいかけた。

ドイツ人が、ドイツ語で「ヤア」と答え、フランス人もフランス語で「ウイ」と答えている。日本人は、「ハイ」といおうか、それとも英語で「イエス」といおうか、と思っっているうちに、思わず「ホイサ」と答えてしまったのであった。時間にしてほんのわずか一秒間のなん分の一かのできごとであつた。

「RO—KU—NO—SHIN—KA—MI—KO—SO—BE……。」

兵士は、パスポートに書いてあるローマ字の名まえを読んで、それから漢字を指さして、

「これは日本文字か？」

とたずねた。

日本人は漢字を指さしながら読みかたを教えた。

「六之進 上古曾部、日本流に読むと、上古曾部六之進。」

兵士はひょうきんな顔をして、日本人の顔をながめた。そしてもうひとりの兵士と顔を見合わせた。

日本人は手をあげて兵隊式の敬礼をした。

ふたりの兵士はならんで答礼をした。そしてふみきりの横木をあげた。

ジープは走りだしていた。

三人のパスポートには、レバノン出国、1952年10月22日のスタンプがおされてあった。

## 2

この山をくだれば、シリアの首都ダマスカスだ。  
道路もよい。正午までには、到着するだろう。

日本人が、ラクダの絵をかけたキャメルというたばこの箱を、ジャンパーのポケットからとりだした。そして一本口にくわえてライターで火をつけた。

ひと息大きくすって、ゆっくりとけむりをはきだした。

ほかのふたりは、たばこをすわない。それで日本人はすすめなかった。

フランス人が、キャメルの箱をとって、かた手の指でチョンとはじきながらいった。

「いよいよ、こいつの国だ。」

「そうだ、きみの国だ。」

と日本人がいった。

ドイツ人はかた手でハンドルを動かしながらいった。

「そうだ、山をおりてさばくへ出たなら、キャメルは歩かさなくっちゃ。ぼくはジープからほうりだしてやる。」

「それなら、ぼくはジープをくわえてウインチ（重い物を持ちあげるまきあげ機）のようにつりあげてやる。」

三人は大声でわらいだした。

国境をこえて新しい国へはいったということ、シリアさばくがもう目の前にあるということが、三人の気持ちを心の底から明るくしているのであった。

ダマスカスはもうすぐだ。ダマスカスへつくまでに、ラベル号と名づけられたジープに乗った日本人、ドイツ人、フランス人三人のチーム(?)について、かんたんに説明をしておくひつようがある。そうだ。

日本、ドイツ、フランスなんて、三人にはもう国籍こくせきの意識はなかった。

三人は、イネ、キャタピラ、キャメルとあだ名でよびあっていた。

イネが日本人、キャタピラがドイツ人、キャメルがフランス人。たばこの名まえといっしょだった。三人のあだ名をまず説明することが、このジープの国際チームのもっともかんたんな解説になりそうだ。

イネの本名は、さきほどのパスポートに書いてあったように、上古曾部六之進かみこそべろくのしん。

キャメルもキャタピラも、パリをたつまでは、「イネ博士」はかせとよんでいた。

しかしいまはもう「イネ」だけである。博士をつけると、なんだか水くさいぐらいの気持ちにかわってきいていたのである。

上古曾部六之進は、パリでキャメルやキャタピラと近づきになった。

上古曾部は日本の農林省につとめる技術者であったが、一九五二年秋、国連の低開発地域援助計画えんごけいけいのもとづいて、アフガニスタンに派遣はけんされることになった。任務はアフガニスタンの農業改良、とくに米作べいさくの指導で、任期は二年間の予定になっていた。

上古曾部は第二次大戦ちゆう、司政官（戦争ちゆう、南方で、軍が政権をとってとき政治をおこなった、りんじの職員）として、ビルマの米作指導をした経験もあった。

上古曾部はアフガニスタンへいくにさきだつて、パリに立ちよつた。パリのユネスコ本部で、アフガニスタンをはじめ、中近東地域における調査資料を手にいれるためであつた。これはあらかじめ農林省から指示されていたことがらであつた。

上古曾部は、アフガニスタンへいくまえに、パリに立ちよれることを内心ひじようによるこんでいた。

ひとつは技術者としての学問的なよろこびであり、いまひとつは個人的なことがらであつた。

上古曾部は長男で弟が五人あつたが、いちばん下の弟の和紀が二年まえからパリに留学してゐるのであつた。ソルボンヌ大学で歴史学を学ぶという理由で渡航したのであつたが、パリへついてからは、美術研究所へかよつて絵の勉強を熱心にはじめていた。

弟はシテ・ユニバーシテ（大学都市）の日本館に寄宿していた。日本の出版社の依頼で、フランスの歴史学の本などをほん訳して、留学資金をつくりだしていた。

六之進は弟の和紀にいちど会いたかつた。どのようなくらしかたをしているのか、それも心配であつたが、画家になることがはたしてできることなのか、また画家として大成するだけの才能があるものなのか、じつさいくわしく話を聞いてみなければ不安でならなかつた。

六之進は自分が長男であるだけに、弟たちのことについてはいつも責任を感じていた。

弟たちがどのような人生の道をえらぼうとも、それは自由ではあるが、みすみす無計画で不安をは